

春を歌ったドイツ民謡にみる人々の季節感
—詩とその背景にある気候との関わりの視点から—

加藤 晴子・加藤内藏進*

**Seasonal Feeling Found in German Folk Songs on “Spring”
—From the Viewpoint of Relationship Between Words of the Songs
and the Climatic Background there—**

Haruko KATO · Kuranoshin KATO

Abstract

In this research, the poetic contents of German folk songs on “spring” and the climatic background for generation of the songs were examined, with attention to the relating seasonal feeling. For deeper understanding of the expression on spring, some Vienna operetta and film music were also referred to for comparison. Main results are as follows.

1) In spring, just at the transition stage from winter to summer in Germany, the temperature rise and the natural change accompanied by it are the most remarkable of a year. Such spring sight and feelings are sung in the folk songs. In general, what the people are impressed by in everyday life could be expressed as a song. Thus, it is suggested that the people’s acceptance of the natural change in spring is a basis of generating the songs and the seasonal feeling there.

2) The words of the song “Rain in May” and the climatic background around May were analyzed. Although the rainfall amount increases around May, its value is rather smaller than in Japan. However, the rainfall in May could be an important factor for generating the songs because of the rainy events at the very stage of the rapid seasonal temperature rise of a year.

3) We paid our attention also to the songs singing a momentary spring simultaneously with the joy of spring. The climatic background was also discussed based on the analysis of the variation of air temperature and the large-scale circulation in summer there.

Key words

seasonal feeling, spring, words of songs and the climate, German folksongs

1 はじめに

音楽作品は、一般に固有の文化的背景をもっている。歌についてみると、言語や生活習慣等と共に、当該地域の気候や季節変化等の自然環境がその生成や表現に関わることが多い。例えば、民謡のように生活の中で自然発生的に生まれ歌い継がれてきた歌では、それぞれの季節にみられる自然の様子や人々の生活の営み等の情景や、それらに伴って生じる感動や哀しみ等の心情が素

※ E-mail hkato@ha.shotoku.ac.jp kuranos@cc.okayama-u.ac.jp *岡山大学大学院教育学研究科・理科

材として歌われているものが多い。いわば、民謡を通して当該地域の生活文化の一端を垣間見ることができるのである。

季節は、一般に大きく1年の周期で繰り返される。そこで生じる様々な自然現象は、人々の生活に直接的あるいは間接的に影響を及ぼしている。人々は、各々の季節のシーンや季節の移り変わりのベースとなる様々な気象現象を視覚や聴覚等を通して肌で感じ取る。そのような体験の重なりを通して季節や気候が常に意識されるものとして心に刻まれるのである。これは人々と自然の交流であり、このような交流は人々の多彩な感じ方や季節感を育む素地となる。すなわち、気候は人々の日々の生活の営みにおける自然環境であると同時に、人々のものの捉え方や感覚の形成に密接に関わるものであり、ひいては芸術や文学の醸造にも影響を与えうるものといえる。

そこで本研究では、これまで継続して行ってきた日本やドイツの春の歌にみる音楽表現とその背景にある季節との関わりに関する研究成果^(註1)を踏まえ、ドイツの民謡を中心に、歌詞の分析と気象データの分析の両面から考察を深め、生活の中で生まれ、歌に表現されてきた季節感を探りたい。資料として主に2009年11月にドイツ、フライブルグで収集を実施した曲を用いることにする。

2 季節変化の概観

2-1 冬から5月への変化(気温や日射)

ドイツでも、海に面した北部と内陸部の中南部における気候の差異は小さくはないであろうが、本稿では、対象とする作品との関連からドイツ中南部に注目する。ここでは、加藤・加藤(2005)による結果を紹介するとともに新たな解析も加えて、ドイツ中南部における季節変化について5月の位置付けに注目して概観する。

図1はアウグスブルク(ドイツ南部、北緯48°22′/東経10°54′)、名古屋、稚内における月平均気温の気候値の季節変化である(加藤・加藤 2005)。なお、名古屋、稚内については、気象庁による1971~2000年の平年値を示す。アウグスブルクについては、データ入手の都合により、World Survey of Climatology (Vol.6, "Climates of Central and Southern Europe", Elsevier Publishing Company, 1977, 全248頁)の表に掲載された、1931~1960年の統計値を使用した。また、気象庁作成の全球客観解析データ(以下、GANALと略称する)に基づき、ドイツ南部の北緯50.625°/東経9.375°の格子点における5日移動平均した地上気温とその前後20日間で平均した値の変化量(プラスは昇温)、及び、30日移動平均した気温の季節経過を、1992年を例に図2に示す(加藤・加藤 2006)。

ドイツ中南部では、九州~関東における3月末~4月初め頃の平均気温である10℃前後に達するのが、やっと5月初め頃である(図1)。しかも、5月頃には、季節的な昇温率も特に大きくなる(図2の気温の「変化量」がプラスの大きな値)。つまり、ドイツ南部では、5月頃にやっと冬の寒さから解放されるような気温に達し、しかも、その時期に急テンポで昇温するという季節遷移を伴う点が興味深い。なお、加藤・加藤(2005)は、対応する500hPa(対流圏中層、地上約5500m程度)の大気循環場の季節進行について、1992年を例に調べている。それによると、4月頃までは上空の偏西風がドイツ付近を含めて南北に広い範囲で強い。しかし5月頃には、月平均場で見た上空の偏西風の比較的強い軸が南北に分かれ、ドイツ付近は、それらに挟まれた比較的温暖な帯状の高気圧に覆われるような循環場に変化する(図3)。

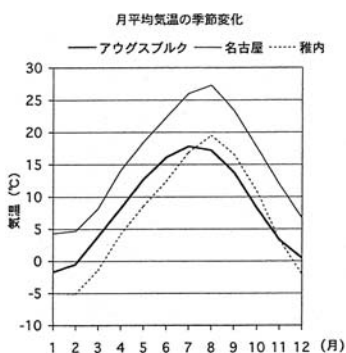


図1 アウグスブルク（太い実線）、名古屋（細い実線）、稚内（点線）における月平均気温の気候値の季節変化（℃）（加藤・加藤（2005）より引用）。

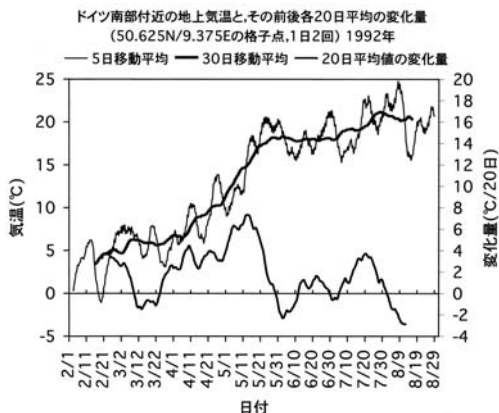


図2 ドイツ南部の格子点における1992年の地上気温の5日移動平均値（細線）と30日移動平均値（太線）、その前後20日間で平均した値の変化量（中間の太さの線。プラスは昇温）（℃）。加藤・加藤（2006）より引用。

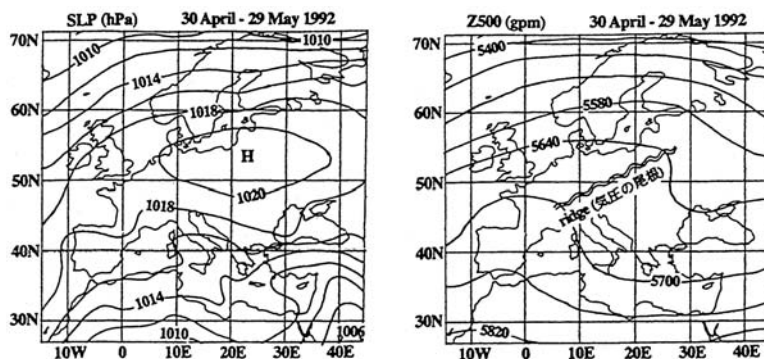


図3 1992年4月30日～5月29日における海面気圧 SLP（左，hPa）と500hPa等圧面高度（右，gpm）の分布。加藤・加藤（2005）より引用。gpm は等圧面高度の単位で、実用上、ほぼ m（メートル）に等しい。

一方、日射の強さも感覚との関連で重要な要素の一つなので、太陽の高度角が45° 以上になる時間数（1日あたり）の季節変化を、南ドイツに対応する北緯50° について図4に示す（加藤・加藤 2005）。比較のために東海地方南岸の緯度に対応する北緯35° についても図示した。

ドイツ南部は、日本列島に比べてかなり高緯度にあるので、太陽の南中時の高度は日本よりも低い。しかし、春分を過ぎると昼間の長さ（可日照時間）は長くなり、加藤・加藤（2005）でも触れたように、昼間の長さが冬至の頃に比べて、約6時間も長くなる。しかも、図4で示されるように、太陽が45° よりも高い高度から照る時間数も、4月から5月にかけて急激に増加する。ところで、太陽の高度角を α とすると、日射の強さは、太陽が真上から照るときの $\sin\alpha$ 倍となる。 $\sin 45^\circ \approx 0.71$ なので、5月の晴天時には、地方時の9時～15時ぐらいの時間帯で、太陽が真上から照る場合の約7割以上の強い日射を受けることが分かる。更に本研究では、加藤・加藤（2005）と同じデータソースに基づき、日照率（日照時間の可日照時間に対する比）を比較した（図は略）。日照率は平均雲量も反映しているが、4月～8月頃のアウグスブルクでは、名古屋

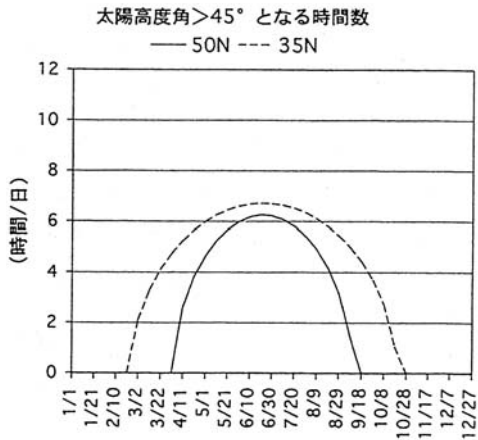


図4 北緯50°(実線)と北緯35°(破線)における太陽高度角が45°以上になる時間数(1日あたり)(加藤・加藤(2005)より引用)。10日毎に値を計算して作図。

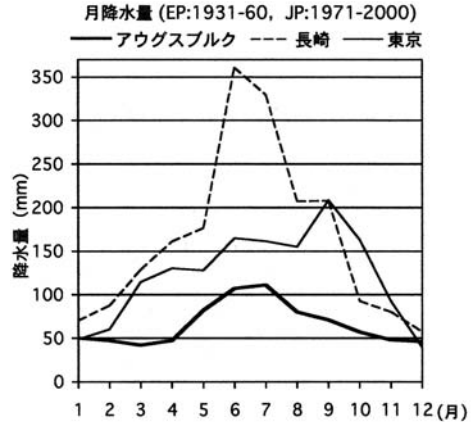


図5 アウグスブルク(太い実線), 長崎(破線), 東京(細い実線)における月降水量の季節変化(mm)。

の4, 5月とほぼ同じ45~50%程度の日照率を示す(梅雨に入るため, 6, 7月の名古屋の日照率は35%近くまで低下する)。従って, アウグスブルクの5月の日照率は, 梅雨に入る前の日本の日照率に近い値をとることになり, 雲に遮られず前述の強い日射を受ける状況は, 平均的には5月にしばしば起きているものと考えられる。

なお, 加藤・加藤(2006), 加藤他(2009)によれば, 日本列島域でも, 3月終わり~4月初め頃(九州~関東での桜の花見の季節), シベリアからの北西季節風のパターンが殆ど出現しなくなることに対応して季節的な昇温が特に大きくなるという。しかも, 昼間の時間が次第に長くなるだけでなく, 3月から4月にかけて, 太陽高度が45°よりも高い時間数が急増する(図4)。また, 日本の春を歌った童謡・唱歌のうち, 昇温が特に大きな春分(3/21頃)~穀雨(4/20頃)頃の時期を対象とした曲が多いという(加藤他 2009)。このように, その時期の気候の特徴だけでなく, 前の季節からの『変化』の大きさも, 音楽作品の重要な背景因子の一つとして注目すべきものと考ええる。

2-2 冬から5月への変化(降水)

次に, 降水の季節変化について, 加藤・加藤(2005)が利用したものと同一データセットに基づき解析・考察した。アウグスブルクにおける月降水量の季節変化(1931~1960年の平均)を図5に示す。比較のため, 長崎, 東京についても併せて示す(1971~2000年の平均, 気象庁のデータより作図)。また, これらの期間における平均月降水量を平均降水日数(ここでは, 1mm/日以上の降水があった日数とした)で除した, いわば、『一雨あたりの日降水量』の平均値の季節変化を図6に示す。また, アウグスブルクにおける降水日数, 雷日数, 霧日数の1931~1960年平均値の季節変化を図7に示す。

ドイツ南部のアウグスブルクでは, 5~8月の降水量は4月までに比べて2倍前後に増加する。これは, 降水日数が6月, 7月頃をピークに多少増加することと, 一雨あたりの日降水量が4月までの約1.5倍程度に増加することを反映している。このように, 5月以降の季節になると,

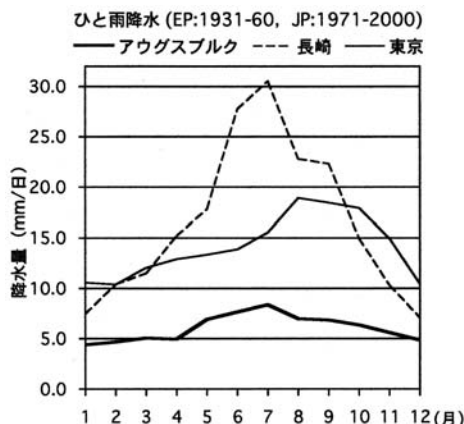


図6 平均月降水量を平均降水日数で除した、いわば、『一雨あたりの日降水量』の平均値の季節変化 (mm/日)。線の種類は図5と同様。

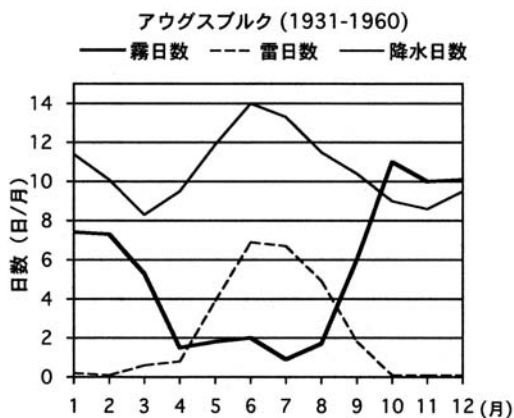


図7 アウグスブルクにおける降水日数 (細い実線)、霧日数 (太い実線)、雷日数 (破線) の季節変化 (日/月)。加藤・加藤 (2005) の図に、降水日数のグラフを追加した。なお、降水日数は、日降水量 1 mm 以上の日の日数を示した。

気候学的には、4月までよりもまとまった雨が降りやすく、月降水量も増加するわけである。同様な緯度に位置するウィーンでも、このような特徴が共通して見られた (図は略)。但し、5月以降に降水が増加するといっても、一雨あたりの平均降水量は5～8月は7～8mm/日前後、月降水量も100mm程度である。一方、梅雨最盛期の降水量が特に多い九州の長崎では (加藤 (2002) 等の解説参照)、6月には一雨平均で約25～30mm/日の降水があり、月降水量は300～350mmに達する。集中豪雨の頻度の低い東日本側でも (図5、6の東京)、梅雨期の一雨あたりの平均降水量は約13mm/日とアウグスブルクの約2倍あり、月降水量もアウグスブルクの約1.5倍ある。また、長崎では、梅雨に入る前の5月でも、一雨あたりの降水量が約17mm/日と、アウグスブルクの5月に比べるとかなり多い。

このように、ドイツ南部の5月以降には、4月までに比べて一雨あたりの降水量も月降水量も増加するが、梅雨のある日本の暖候期に比べると、平均的にはそれほど強い雨が降るわけではなく、また、トータルの降水量も少ない点に注意する必要がある。但し、加藤・加藤 (2005) も指摘したように、アウグスブルクでは5月から6月にかけて雷日数が急増する点も興味深い (6月には、週あたりに換算して1～2回の割合に増加) (図7)。雷雨は時空間的な集中性の強い積乱雲に伴って起きるので、5月以降にそのような現象が起きやすくなるのが感覚的な面にどのような影響を与えるのか、更なる検討が必要であろう。また、通り雨のような雷雨は、降っている時間は短くても、その時間帯に限っては強雨となりうるので、その全体の降水量に対する寄与についても今後に残された検討課題となる。また、アウグスブルクの霧日数が4月頃から急に少なくなることは、『光』の条件にも関連して興味深い。

2-3 夏の気温変動と大気循環場の特徴に関して

ドイツの季節に関して、宮下 (1982) は、「きわめて短い春と秋を別にすれば、アルプスの北側の世界には夏と冬の二つの季節しかない。」、小塩 (1982) は、「ドイツ語にはもともと夏と冬の二語はあったが、春と秋の二語はなかった。それらしい季節はあるのだけれども、ドイツ人の

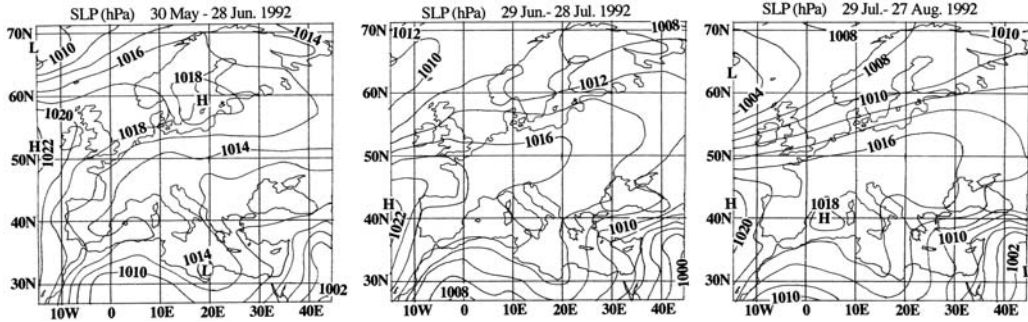


図8 1992年の平均海面気圧の分布 (hPa)。左から、ほぼ6月、7月、8月に対応。

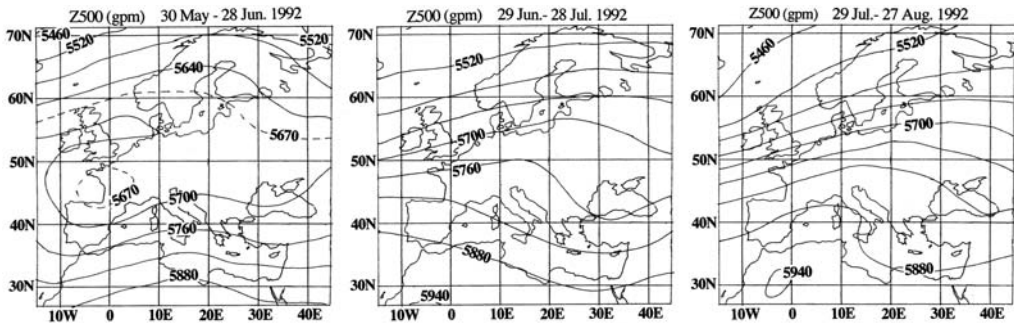


図9 1992年の平均500hPa等圧面高度の分布 (gpm)。左から、ほぼ6月、7月、8月に対応。

先祖であるゲルマン人は春と秋を特に意識しなかったのだろう。ずいぶん後になって春と秋の語がつくられた。」と述べている。2-1で述べたように、ドイツ南部では、5月になってやっと、しかも急に、北日本を除く日本列島の春のような気温になる。一方、図1や図2によると、ドイツ南部では、5月に急昇温して6月に20℃近くまで達した時点で季節的昇温は止まり、8月頃までその状態の気温で経過する。つまり、平均気温20℃足らずと、九州～関東よりもかなり気温の低い『夏』が8月頃まで続くことになる（稚内の夏と同様な平均気温）。

図8、図9はそれぞれ、1992年を例に、GANALに基づき計算した6～8月頃の平均海面気圧と500hPa等圧面高度の分布である。月平均場で見ると、6月以降には、2-1で述べた5月頃にドイツを覆っていた温暖な高気圧（地上の高気圧の上空が、南北の偏西風の強風軸に挟まれ気圧の尾根となる）が、不明瞭となっている。7、8月には、上空の偏西風の強いゾーン（図9で、500hPa等圧面高度の等値線が比較的混んでいる部分）が、ドイツ南部付近の緯度帯まで次第に南下していく。つまり、この時期には、北側の寒気の侵入の影響も受けやすくなることが示唆される。

5日移動平均した気温の時系列（図2の細線）によれば、6月以降には、気温が20～25℃と比較的高温の期間も度々現われるものの、逆に気温が15℃程度しかない低温期間も度々繰り返されている（30日移動平均値からのずれを参照）。そこで、図2のドイツ南西部の格子点における「地上気温の5日移動値から30日移動平均値を引いた偏差」の絶対値が比較的大きかった期間を表1のように抽出した（その気温偏差が、数日～10日程度の持続性を持つ期間を抽出）。そして、表1の『低温期間』、『高温期間』毎に、地上気温、海面気圧、500hPa等圧面高度について、5日移動平均値から30日移動平均値を引いた偏差の場の合成を行った。その結果を、図10、11に示す。

表1 1992年夏について抽出した低温期間と高温期間のリスト

低温期間	高温期間
6月5日12UTC～6月12日12UTC	5月30日00UTC～6月2日00UTC
6月18日12UTC～6月21日12UTC	6月26日00UTC～7月3日00UTC
7月4日12UTC～7月14日12UTC	7月18日00UTC～7月23日00UTC
7月25日12UTC～7月28日12UTC	8月1日00UTC～8月11日00UTC
8月12日12UTC～8月16日12UTC	

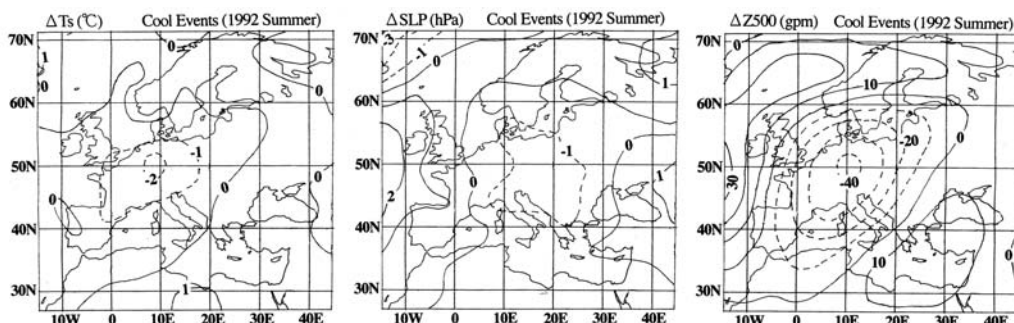


図10 地上気温（左図，℃），海面気圧（中央図，hPa），500hPa等圧面高度（右図，gpm）の偏差場の、『低温期間』での合成。

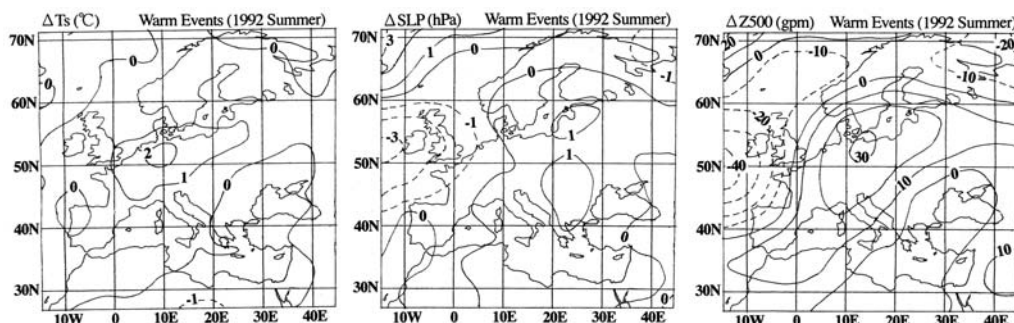


図11 地上気温（左図，℃），海面気圧（中央図，hPa），500hPa等圧面高度（右図，gpm）の偏差場の、『高温期間』での合成。

『低温期間』、『高温期間』ともに、気温偏差の絶対値が1℃以上となる領域の広がり、東西に約20°（約2000km）、南北に約10°（約1000km）程度の空間スケールしかない。また、いずれのカテゴリーも、海面気圧の偏差に比べて500hPa高度の偏差の絶対値が顕著である（海面気圧1hPaの差は、1000hPa等圧面高度で約10m強に対応する）。気温変動に関連して、ドイツ南西部よりも西方の地域では、『低温期間』の北風成分による下層の寒気移流や、『高温期間』の南風成分による暖気移流も示唆される（850hPa。図は略）。しかし、ドイツ南西部は、そこでの『低温期間』には中心に寒気を持つ上層の低気圧に覆われており、『高温期間』には中心に暖気を持つ上層の高気圧に覆われている。つまり、ドイツ南西部における『高温期間』、『低温期間』の変動は、下層の水平風による暖気や寒気の直接的移流というよりは、上空の偏西風の蛇行に伴う偏差場で見えた温暖高気圧、寒冷低気圧の出現に関連しているものと考えられる。

表2 00UTC (地方時の0時40分頃), 12UTC (12時40分頃)での,
図2と同一地点(北緯50.625°/東経9.375°の格子点)における
地上気温(°C)。各期間での合成値をGANALに基づき示す。

	00UTC	12UTC	12UTC-00UTC
『低温期間』	13.7	19.4	5.7
『高温期間』	17.2	26.5	9.3

また、図2のドイツ南西部の格子点において各期間で平均した、00UTC (地方時の0時40分頃), 12UTC (地方時の12時40分頃)での地上気温の合成値を表2に示す。両時刻における気温差は、気温の日較差(1日の最高気温と最低気温との差)に近いものと見なせる。興味深いことに、両期間の平均気温が異なるだけでなく、12UTCから00UTCの値を引いた差は、『高温期間』の方が『低温期間』よりも大きい。つまり、『高温期間』には、日平均値に対しても日中の最高気温はかなり高くなるが、『低温期間』には、昼過ぎの気温でも20°Cを下回るような涼しさであることが分かる。なお、九州北部～関東では、5月下旬頃の日平均気温が20°Cぐらいである。このように、ドイツ南部では、『夏』ではあっても、日中の気温が上がらない期間が季節内変動の一環として度々出現することに注意が必要である。

3 ドイツの民謡にみる春

3-1 冬から春への移り変わりの中でみる春の歌

ドイツの民謡においても季節を歌った歌は多い。ここでは「春」をテーマにした歌を取り上げ、歌われている詩の内容と、その背景にある気候との関わりについて考察を行う。そこから、当該地域の人々の生活の中で「春」がどのような存在として意識されているのかをみていきたい。資料として“*Leselöwen Frühlingslieder*”(1987, Loewes Verlag, Bindlach)^(註2)、“*Die schönsten Volkslieder*”(2004)、“*Deutsche Volkslieder*”(2001)^(註3)を用い、その中から「春」に関する歌44曲を抽出し、分析・考察の対象とした。これらの「春」の歌では、歌われている時期が注目される。「春」「夏」「秋」「冬」という大きな括りで、春その時の事象、例えば、「花が咲く」「鳥が鳴く」等の自然現象や人々の喜びを歌った歌“*Grüß Gott, du schöner Maien*”(譜例1)、“*Alles neu macht der Mai*”(譜例2)があると同時に、2-1、2-2で述べたような、冬から春への季節の移り変わりによって生じる自然の事象やそれに伴う人々の心情が歌われた歌が14曲みられた。例えば、“*Winter ade*”(譜例3)、“*Nicht lange mehr ist Winter*”(譜例4)では、「冬との決別」や「冬から巡りくる春

譜例1 “*Grüß Gott, du schöner Maien*”[「こんにちわ、素晴らしい5月」]

Aus dem 16. Jahrhundert

1. Grüß Gott, du schön-er Mai en, da
Tust jung und alt er-freu en mit
bist du wied- rum hier. Die lie- ben Vög- lein
dei- ner Blu- men Zier! die für- nehm- ste Stell.

2. Die kalten Wind verstummen,
der Himmel ist gar blau,
die lieben Bienlein summen
daher auf grüner Au.
O holde Lust im Maien,
da alles neu erblüht,
du kannst mir sehr erfreuen
mein Herz und mein Gemüt.

歌詞概要：小鳥が歌う、小夜啼鳥が鳴く、冷たい風がやむ、空が青い、蜂が羽音を立てる等の春の様々な情景を歌い、生命に溢れ心躍る春を歓迎し、讃えている。

譜例 2 “Alles neu macht der Mai” 「5月はすべてを新しくする」

Worte: H. A. von Kamp
Volkweise

Al-les neu macht der Mai, macht die See-le
Sonn-en schein, duf-tend pran-get Flur und Hain,
frisch und frei. Laßt das Haus, kommt hin-aus,
Vo-gel-sang, Hör-ner-klang tönt den Wald ent-
win-det ei-nen Strauß! Rings er-glän-zet
lang.

歌詞概要：5月はすべてを新しくすると讃え、戸外に出ようと呼びかけている。太陽が輝く、野や林に芳しい香りが立つ、鳥が歌う、角笛が響く等の瑞々しい情景と開放的な心情が歌われている。

譜例 3 “Winter ade” 「冬さようなら」

Worte: Heinrich Hoffmann von Fallersleben
Fränkische Volkweise

1. Win-ter, a-del Schei-den tut weh;
Gerne vergeß ich dein,
kannst immer ferne sein.
Winter ade! Scheiden tut weh.
a-ber dein Schei-den macht, daß mir das
2. Winter ade! Scheiden tut weh.
Gerne vergeß ich dein,
kannst immer ferne sein.
Winter ade! Scheiden tut weh.
Her-ze lacht. Win-ter a-del Schei-den tut weh.
3. Winter ade! Scheiden tut weh.
Gehst du nicht bald nach Haus,
lacht dich der Kuckuck aus.
Winter ade! Scheiden tut weh.

歌詞概要：冬への別れが呼びかけられている。そこでは、冬との別れはつらいものではなく、いよいよ春が来るという期待感が感じられる。

譜例 4 “Nicht lange mehr ist Winter” 「冬はもはや長くない」

Im Kanon zu 4 Stimmen
Mündlich überliefert

Nicht lan-ge mehr ist Win-ter, schon glänzt der
die Ler-che, der Kuk-kuck ruft im Hain: Kuk-
Son-ne schein. Dann kehrt mit neu-en Lie-dern der
kuck, Kuk-kuck, da wol-len wir uns freun!
Früh-ling bei uns ein. Im Fel-de singt

歌詞概要：早くも太陽の光が輝き、冬はもう長くはないという言葉で春を待つ心情、春への期待が歌われている。広野で雲雀が歌い、郭公が森で呼ぶ等の春に転じる情景が歌われている。

への期待感」等が歌われている。これらの歌からは、冬がただじっと耐えるだけのものではなく、春になるための前提、ステップであるという位置づけが感じられる。このように、「春」の歌では、春という季節の事象と共に、冬から春への季節の移り変わりが取り上げられて歌われている点が興味深い。春の到来への期待感が、この時期の気象現象、それに伴う自然の変化を介して表現されている。

3-2 5月の雨の歌にみられる特徴と季節変化の中での位置づけ

季節には、それぞれの特徴がある。そこでは、日射、気温変化、降水量等の関係がみられ、それが人々の季節感やイメージに繋がると考えられる。気温だけでなく雨に関しても、「春の雨」と「秋の雨」では、一般的に感じ方が異なる。そこには降水量自体があまり違わないとしても、春には日射が強まり気温が急速に上昇するのに対して、秋には日射が弱まっていき地面が急速に冷えてくる(気温も下がる)ことが関係すると思われる。また、秋になると急速に夜が長くなり、ドイツ南部では霧も出やすくなる(例えば、図7)。このような条件の違いが肌で感じられ、それが人々の「春の雨」「秋の雨」のイメージに繋がるといえる。

更に、ドイツの冬から夏への進行において、2. で述べたように5月は特筆すべき時期の一つである。そこで5月の雨に着目し、それをテーマにした歌について、歌われている内容と歌の背景にある気候の特徴についてどのような関わりがあるのかを考察する。そこから、生活の中で5月の雨がどのようなものとして認識されているのかをみていきたい。資料として、ドイツ、フライブルグ民謡研究所^(註4)において、地域の民謡として収集され、採譜、整理されている5月の雨を歌った歌（全9曲）を用いる。今回取り上げた曲は、主にドイツ西部、ライン川の西の地域で歌われていた歌である。表3に歌唱地域、旋律、歌詞、歌われ方を示す。

上記9曲の歌には、共通して、5月の暖かい雨は私（小さい自分）を成長させる（大きくさせる）ということが歌われており、5月の雨が生命を育む恵みの雨と捉えられていると解釈でき

表3 5月の雨の歌一覧（全9曲）

曲例	歌唱地域	旋律・歌詞・歌われ方
1	Viersen, Dürken Süchteln	 <p>Mairäge mak mich gruet, ich bin so klen wie ne Hahnepuet.</p> <p>歌詞：私は、ひよこのように小さいけれど、5月の雨が私を大きくする。 歌われ方：雨に打たれながら通りで子どもたちが歌う。</p> <p>【参考の詩1】 Mairähñ, Goddessähñ, fells op mich, dann wahs ich. 5月の雨、天からの祝福、私の上に落ちてきて私は大きくなる。 ・譜例1の歌詞の感覚と同種として収録されていたもの。</p> <p>【参考の詩2】 Rähne, Rähnedröpche, fall net op mi Köppche, fall net op mi Botterfass, dann wärd ich och net klätchenass. 雨、雨の滴、私の頭の上に落ちてこない、 バター桶の上にも落ちてこない。 私も濡れない。 ・ジブシーの子どもの歌。 ・子どもの言葉に由来するものらしい。 ・ケルン近くの言葉の可能性あり。</p>  <p>歌われた地域</p>
2	Cleve	 <p>Mai- regen, mak mich grot, ek sijn so klen as'n Buxsenknopp.</p> <p>歌詞：私は半ズボンのボタンのように小さいけれど、雨が私を大きくする。</p>
3	Kleve	 <p>Meirägen makt min groot, ek sin sörne kleene Bokseknopp.</p> <p>歌詞：曲例2に同じ</p>
4	不明（※）	 <p>Mairän, mak meeh jräst, ech ben so klen wie ne Buxelknop!</p> <p>歌詞：曲例2に同じ</p>

5	Küln	 <p>Mai- rähen, dröpp op mich, fall op mich, dann waaßen ich.</p> <p>歌詞：5月の雨、滴が私の上に垂れてきて、私は大きくなる。</p>
6	Küln	 <p>Mairähen, dröpp op mich, fall op mich, daan waaßen ich.</p> <p>歌詞：曲例5に同じ</p>
7	Aachen	 <p>Mai- ren, Drüpe-tren, Fall op mich, da was ich.</p> <p>歌詞：5月の雨、滴、私の上に落ちてきて私は大きくなる。</p>
8	Aachen	 <p>Meij - räen¹⁾, Triippe - träen, Fäen op mich, da waas²⁾ ich!</p> <p>歌詞：5月の雨、雨の滴、私の上に雨が降ってきて、私は大きくなる。 歌われ方：雨が降る中に立って子どもが歌う。</p>
9	Kleve	 <p>Mai- räge, mak miyε groot, eck sijn so kleen as en Buxenknop.</p> <p>歌詞：5月の雨、私は半ズボンのボタンのように小さいけれど雨が私を大きくする。</p>

※曲例4の歌唱地域については、資料に〈ミュンヘン〉の記述がみられるものの、はっきりしない。

※曲例5と曲例では歌詞、旋律が同じである。フライブルグ民謡研究所では各々に番号を付して整理されており、本表においてもそれに従って個別に表示した。

※都市名、ケルンとクラークの綴りについては、フライブルグ民謡研究所の資料の表記に従った。

る。キーワードは、「5月の雨」(Mairäge, Mairäh, Mairegen, Mairähen等)、「私(子ども)を大きくする、大きくなる」(mak mich gruet, mak mi grot, dann waaßen ich等)である。歌詞には方言がみられ、今日のドイツ語ではほとんど使われないような古い言葉もみられる。また、語呂合わせ、言葉遊び的な要素もみられる。旋律は、9曲共素朴で類似性がみられる。歌われている地域が互いに近いことから、一つの節の変容の可能性も考えられる。

また、【参考の詩1】では、「5月の雨は天からの祝福である」と歌われており、人々にとってこの時期の雨は喜びをもたらすものと捉えられている。【参考の詩2】は、詩の文面をみる限りでは全く異なる内容のように感じられる。文面自体はナンセンスなものといえる。しかし、ここで興味深いのは、「私も濡れない」という表現である。なぜ「濡れない」のであろうか。それについては次の2点から推測される。第一には、「雨に濡れること自体は全く苦にならない」という心理的な側面、言い換えれば、濡れることに対する人々の認識である。第二に、「雨自体が濡れてもたいしたことのない量である、あるいは濡れても気にならない条件(例：気温)」であるという自然環境の面である。

さらに、雨に対する人々の認識を知る上で、これらの曲の歌われ方は興味深い。表3に示したように、曲例1や曲例8では「雨に打たれながら通りで子どもたちが歌う」という歌われ方がされる。このように雨を避けるのではなく、自ら雨を身体に受けて歌うということから、5月の雨が子どもたちにとって快の存在であること、少なくとも雨が不快な存在ではないことが推測でき

る。では、「なぜ、5月の雨に濡れても苦にならないのか」に関連して、5月の気候の特徴の要点を整理しよう。

フライブルク民謡研究所での民謡資料の収集時に、ライブラリー担当のB.ブック氏が「5月の雨は作物を成長させる恵みの雨になる（暖くなる前の雨では成長出来ない）。だから、そのような5月の雨は、子どもたちを成長させる雨として受けとめられるのかも知れない」という趣旨のことを述べていた。2-2で述べたアウグスブルクの降水量の例に示されるように、ドイツ南西部では、4月までに比べて5月以降の月降水量や一雨あたりの平均降水量は確かに増加するが、それらは西日本の3月頃に比べても多くない（アウグスブルクの一雨あたりの平均降水量は、5月で7mm/日程度）。しかしドイツ南部では、5月頃には気温の上昇率が特に大きく、しかも、九州～関東の3月末～4月初め頃の気温によく到達する（図1、2）。また、晴天時には太陽高度の高い時間帯も長い（図4）。

つまり5月頃は、総降水量や一雨あたりの降水量は多少の増大にとどまるとしても、ある程度の暖かさの『閾値』を超えて急に気温が上昇する時期である。従って、本節で検討した『5月の雨』を歌った歌の重要な背景の一つとして、『気温が急激に上昇して十分暖かくなってきた時期の雨』であることが挙げられよう。このように、雨は、開花等の目に見える自然環境の変化だけでなく、他の気象の諸現象自体と合わさることによっても、人々の心理にも影響していることが考えられる。

3-3 過ぎ去る春、夏への進行も意識した5月

これまでドイツ民謡の春を歌った歌や5月の雨の歌について、冬から春への移り変わり、雨に対する認識に着目しながら歌われた内容と気候の関わりをみてきた。春になって目にするものや肌で感じられる自然の様子、春への期待感や賛美、生命を育む雨等が素朴な旋律で歌われており、そこには自然を受容し、生活していく人々の意気が感じられる。それらは、歌の生成の基底をなすものといえよう。

このような民謡の一方、芸術歌曲においては、春の到来の喜び、春への賛美とは対照的な心情を歌った歌もある。その背景には、季節は巡りくるものであることから、待ちわびた春もやがては去る、一番良い時は長くはなく儂いという「春」の捉え方がみられる。また、2-3で述べたように、6月になると平均気温は年最高値に達する（6月には夏になる）。しかし、ドイツの夏は日本の夏のような気温までは上昇しない。しかも、夏になっても、日最高気温が20℃に満たないような気温の低い期間もしばしば現われて持続する。

民謡は生活の中で自然発生的に生まれ伝承されてきた歌であり、歌われた情景やその変化、それらに伴う心情等を通して当該地域の人々の季節感がみられた。では作品として作られ民謡と同様に人々が日々の生活の中で親しんできた歌にはどのような季節感がみられるであろうか。ここでは、比較的新しい時代の大衆の音楽であるヴィーン・オペレッタ^(註5)と同時代の映画音楽作品から例を挙げながら、「春」がどのように歌われているのかをみていくことにする。譜例5の1～3に示した曲では、時代背景として社会に対する人々の退廃的な物の見方も多分に反映されている。没落していく貴族階級を対象として、今を精一杯生きることのみが生きる道と考えられた、いわば利那主義の時代である。そのような中で、5月は至福の時であるものの、夢のようなもの、すぐに過ぎ去るものとして歌われている。言い換えれば「春」が「消え去るもの」であることを前提として、その瞬間にしがみついていくという感情も、一つの季節感であり、それが作品を通

して人々の共感を呼んだともいえよう。

なお、F. レハールやO. シュトラウスが活躍した1900年前後はオペレッタ第2期、白銀時代といわれている。「会議は踊る」は、1814年のウィーン会議を時代背景にした1931年制作のオペレッタ映画である。

譜例 5

曲例 5-1 「ワルツの夢 “Ein Walzertraum”」から『静かに静かに “Leise, Ganz leise”』（O. シュトラウス）
bar. 79-90

〈歌詞 訳詞：鈴木芳子〉

美しの五月に生きる歓びと愛を 束の間のときめきを 今一度 美しの五月に今一度 愛を語ろう

曲例 5-2 「メリー・ウィドウ “Die lustige Witwe”」からロマンス『ばらの蕾が5月に開くように』（F. レハール）
bar. 1-8, (略) bar16-24

〈歌詞 訳詩：渡辺譲〉

ばらの蕾が5月に開くように 私の心に愛の花が咲いた（中略）でも幸福の訪れとともに私は去らなければならない 春の光はかげり 蕾が枯れてしまったのか（後略）

曲例 5-3 ドイツ映画「会議は踊る “Der Kongreß tanzt”」（1931年）主題歌『ただ一度だけ “Das gibt's nur ein-mal”』（注6）
bar. 24-31 (略) 57-64

※歌詞対訳は表4を参照

“Das gibt's nur einmal”は複数の日本語訳詞で親しまれた曲であり、昭和9年に葉巻逸雄の訳詩、奥田良三の歌唱で大ヒットした《命かけて只一度》、井田誠一訳詩、渡辺はま子の歌唱による《ただ一度》等がある。表4に原詞の対訳と各歌唱における日本語訳詞についてリフレイン部分を示し、言葉の表現を比較する。

表4に示したように、日本語訳詞では2編共、原詩で歌われている内容「〈胸躍る恋の喜び〉が〈二度とないもの〉であり〈消える儂い夢〉である」にそったものになっている。日本語訳で大衆に親しまれた外国曲では、もとの歌詞の内容とは大きく異なる内容で歌われることがしばしばみられる。例えば、スッペ作曲「ボッカチオ Boccaccio」の“Hab ich nur deine Liebe”は《恋はやさし野辺の花よ》という曲名と恋の思いを花に託した歌詞で親しまれてきた。しかし、《ただ一度だけ》の場合、原曲の歌詞で「一度だけ、二度と起こらない」という言葉が繰り返し現れる意を受けて、日本語訳では「青春の花は咲けば」や「唄え今日の喜び」等の具体的な表現が加わり、聴く者がイメージを膨らませ、もとの曲の味わいを感じることができるような歌詞になっているといえる。

注目されるのは、原詞では「一度しか起きないこと」が「どの春にも5月は一度しかないから」という表現で締めくくられ「5月」がキーワードになっているのに対し、日本語訳詞には「5月」という語は登場しない点である。ここに日本の季節感が垣間見られよう。日本では平均的に3月～4月に春の盛りを迎える。5月は春といっても晩春であり、これから向かう「夏」が意識される時期である。季語においても5月は夏である。また、ドイツの5月と「夏」との気温差は、日本の5月と「夏」との気温の差に比べてもかなり小さい。従って、日本では5月が過ぎててもかなり異なる季節感を堪能出来る「夏」があるが、ドイツの夏は、逆に春との温度差が大きいいため、過ぎてしまった『完全な春』を想い起こしやすいのかも知れない。このような季節感の違いが日本語訳詞を創作する際のもとにあったと考えられる。「二度と起こらない幸せ」や「儂い恋」等について人々の共感を得るような表現とするために、想像を掻き立てるような具体的な言葉が加えられた一方で、「5月」という語が必ずしも必要な語ではなかったと考えられる。人の心情に関わる表現については、それがどのような言葉や言い回しをもって表されるのか興味深い。詞にみられる慣用的な表現をはじめ、地域による人々の季節感の違いは表現のための一つの要因になりうるものといえるのではないだろうか。

表4 “Das gibt's nur einmal” の原詞の対訳と日本語訳詞（葉巻逸雄・井田誠一）

原詞対訳	葉巻逸雄による訳詞 ^(注7)	井田誠一による訳詩 ^(注8)
これはただ一度だけ、これは二度と起こらない。 素晴らしすぎて、本当とは思えない。 奇跡のように天国から黄金の光が降り注ぐ。 これはただ一度だけこれは二度と起こらない。 ひょっとするとただの夢かも知れない。 これは一生に一度しか起こらない。 明日には過ぎ去っているかもしれない。 これは一生に一度しか起こらない。 なぜなら、どの春にも5月は一回しかないのだから。	只ひととき 今日と見つる我が命の幸 空開けて降り注ぐバラ色の光 只ひととき 今日と見つる若き日の幻 命かけて只ひととき 儘よ、明日は消ゆる夢 命かけて只一時 青春の花は咲けば	恋すりや笑顔に 涙があふれて 不思議な気持ち 小鳥も野薔薇も微笑みかける 今日楽しい日よ ただ一度、二度とない恋の日夢の日 七色の雲光る はてなき大空 ただ一度、二度とない 花咲くひととき 情熱のくちづけも 春の日の暮れぬ間に 唄え今日の喜び

4. まとめと今後の展望

生活文化の視点から音楽をみる時、民謡のように自然発生的に生まれ歌われてきた歌では、最も注目される要素の一つが歌詞である。ドイツ民謡の春の歌の歌詞では、春そのものだけでなく、冬から春への季節の移り変わりに目が向けられ、自然の様子や心理等様々な角度から表現されていることが興味深い。移り変わる季節を享受することが、生活の基盤を成すと同時に、歌の生成にも繋がったと考えられる。ヴィーン・オペレッタにみられた刹那的な春の表現も、その延長上にあるものと位置づけることができるのではないだろうか。各場面の歌やストーリーの展開を通して、5月が単に暗い冬との対比において喜ばしい季節であるだけでなく、春が消え去る儂いものであり、それを前提にその瞬間にしがみついていくという人の姿が映し出されている。そこでは「夏」が季節変化の頂点ではなく、好天の持続という面では5月がその頂点であるという気候特性も深く関連しているのではないかと考えられる。

今後、ヴィーン・オペレッタや映画音楽作品等の楽曲分析を行って音楽表現の観点からも考察を深めたい。また、外国曲でありながら、その国や地域独自の歌詞や訳詞で大衆に親しまれている作品を取り上げ、表現の仕方と地域の気候や風土、季節感等の関わりについて比較・考察していきたい。

【注】

1) これまでの研究成果は以下のような内容である。

- ①日本の童謡・唱歌、芸術歌曲、ドイツ文化圏の古典派・ロマン派歌曲をみると、季節を素材としたものが多い。その表現は、春の情景等の自然環境の描写や模倣と、内面心情表現やイメージに整理される。
- ②日本の童謡・唱歌では、早春から初夏に至るまで、季節進行に伴って生じる光景や心情が歌われている。この背景には3月から5月の季節的な昇温が大きいことがみられる。
- ③ドイツ文化圏の歌においても厳しく長い冬と対比して春の訪れが歌われているものが多い。詩にみられるキーワードは5月である。春が単に冬からの解放というだけでなく、5月が1年中でもっとも生気に満ちた時期であることが歌の生成に関係していると考えられる。論文「日本の春の季節進行と童謡・唱歌、芸術歌曲にみられる春の表現—気象と音楽の総合的な学習の開発に向けて—」岡山大学教育実践総合センター紀要 第6巻2006, 「ドイツにおける春の気候的位置づけと古典派、ロマン派歌曲にみられる春の表現について—教科をこえた学習に向けて—」岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻2005, 「日本の春の季節進行と季節感を切り口とする気象と音楽との連携—小学校での授業実践—」天気 Vol. 56-No. 4, 2009, 日本気象学会。

2) “*Leselöwen Frühlingslieder*” (1987, Loewes Verlag, Bindlach) は、春をテーマとした歌全36曲からなる曲集である。ドイツ民謡の他に、パウマン、モーツァルト、メンデルスゾーン、プレトリウス等の作曲家の作品も掲載されている。

3) “*Die schönsten Volkslieder*” (2004), “*Deutsche Volkslieder*” (2001) では、歌がカテゴリーで分類されており、その一つに「季節の歌」(*Jahreszeitenlieder, Jahreszeiten*)がある。

4) フライブルグ民謡研究所: Deutsches Volksliedarchiv, Institut für internationale Popularliedforschung, Silberbachstraße 13 D-79100 Freiburg i. Brsg.

5) ヴィーン・オペレッタは、ロマンティックな物語性とヴィーン風のワルツ歌曲によって人気を呼んだ。19世紀後半から20世紀初頭に黄金時代を迎える。大衆的な音楽劇形式として、今日のミュージカル・ブレイにも影響を残している。代表作品の一つに『メリー・ウイドウ』“*Die listige Witwe*” (フランツ・レハール Franz Lehár, 1870-1948) がある。

6) 作詞・作曲は R. Gilbert-WR. Heymann。身分を隠したロシア皇帝から郊外の別荘に招かれた帽子屋の娘クリス

トルが馬車に乗り、夢見心地で歌う。また終幕の皇帝との別れの場面では、居酒屋の主人が彼女にこの歌を歌いかける。本曲は作品全体を象徴する非常に意味深い曲である。

7) You Tube 奥田良三 命かけてただ一度 Das gibt's nur einmal-Ryozo Okuda

8) <http://music.goo.ne.jp/lyric/LYUTND94620/index.html>

【主要参考文献】

- 『ドイツ方言学 言葉の日常に迫る』河崎 靖, 現代書館, 2008
 『NHK ドイツ語《歌と詩》』中島悠爾・田ノ岡弘子, 日本放送出版協会, 1973
 『ドイツの言語文化』(テレビ大学講座)西尾幹二・宮下啓三, 旺文社, 1980
 「ドイツにおける春の気候的位置づけと古典派、ロマン派歌曲にみられる春の表現について—教科をこえた学習に向けて—」加藤晴子・加藤内藏進, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第5巻, 43-56, 2005。
 「日本の春の季節進行と童謡・唱歌, 芸術歌曲にみられる春の表現—気象と音楽の総合的な学習の開発に向けて—」加藤晴子・加藤内藏進, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第6巻, 39-54, 2006
 「梅雨」『キーワード気象の事典』加藤内藏進, 朝倉書店, 新田尚 他 編, 221-226, 2002
 「日本の春の季節進行と季節感を切り口とする気象と音楽の連携—小学校での授業実践—」加藤内藏進・加藤晴子・逸見学伸, 天気, 203-216, 2009
 「森と山とメルヘンと—自然・伝説・詩情—」宮下啓三『ドイツ文学の基底—思弁と心情のおりなす世界—』西尾幹二編, 有斐閣選書, 90-122, 1982
 「現代ドイツの教会と家庭生活—成熟社会における日常生活—」小塩節『ドイツ文学の基底—思弁と心情のおりなす世界—』西尾幹二編, 有斐閣選書, 124-157, 1982

【資料】

- 『新訂・世界言語文化図鑑』バーナード・コムリー, スティーブン・マシューズ, マリア・ポリンスキー編, 片岡房訳, 東洋書林, 2005
 “Leselöwen Frühlingslieder” Loewes Verlag, Bindlach, 1987
 “Die schönsten Volkslieder” Bassaman Verlag, einem Unternehmen, 2004
 “Deutsche Volkslieder” Philipp Reclam jun, Stuttgart, 2001
 “Das neue Operettenbuch” Scott's Söhne・Mainz
 “Die 24 schönsten Wiener Melodien” フィリップスレコード 20PC-20-21
 CD: レハール喜歌劇「メリー・ウイドゥ全曲」EMI CE30-5562

【謝辞】

ドイツ民謡の資料収集では、フライブルグ民謡研究所研究員B. ブックさんとM. シュレーダーさんにご尽力いただいた。5月の雨の歌の歌詞にみられるドイツ語方言の解釈に際しては、沖縄芸術大学の小池啓子先生のご指導をいただいた。ご協力、ご指導に心よりお礼申し上げます。